

平成23年度 第1回千葉県立博物館協議会 議事録

日 時：平成23年8月31日（水） 13：30～16：00

会 場：千葉県立中央博物館 会議室

出席者

（委員）：明石委員（議長）、大澤委員（副議長）、秋田委員、鶴澤委員、大森委員、
岡本委員、片山委員、川崎委員、栗原委員、齋藤委員、常光委員、水島委員、
茂木委員、吉野委員

（博物館・文化財課）：玉浦美術館長、上野中央博物館長、石井現代産業科学館長、
三浦関宿城博物館長、豊田房総のむら館長、永沼文化財課学芸振興室長

日 程

- 1 開 会
- 2 博物館あいさつ
- 3 文化財課長あいさつ
- 4 議事
 - （1）平成22年度各博物館の地域振興について
 - （2）各博物館の研究活動と成果還元について
 - （3）その他
- 5 その他
- 6 閉会

<博物館あいさつ> （三浦館長）

東日本大震災で、岩手県陸前高田市立博物館における凄まじい被災状況が、国立歴史民俗博物館で7月30日に開催された特別集会「被災地の博物館に聞く」で報告された。千葉県立5館では躯体や展示物等に被害が見られたが、幸いにも来館者や職員には被害がなかった。来館者の避難誘導には対しては日ごろの訓練が生かされた結果ではないかと考えている。地震直後から、臨時休館や開館時間を調整しつつ展示会や講座等を実施し、現在は節電対策を取りながら通常開館している。県立5館では各館で被害に対応しているが、東北地方の被災された博物館では、全国の博物館やボランティアが復旧作業に携わっている状態がマスコミ等で取り上げられており、その活動にはたいへん感銘を受けている。また、復旧作業には県立中央博物館も関わっている。この東日本大震災の教訓として、一館では対応しきれない被害に対してどのように取り組むかという大きな課題が浮かび上がっている。千葉県では現在83館が加盟する千葉県博物館協会に地域振興委員会があり文化財救済ネットワークの構築を目指している。県立館としてどのように対応するか今後、検討することになると考えている。

今年度も財政状況の厳しい中、博物館を取りまく環境は益々厳しくなっている。千葉県教育振興基本計画の3つのプロジェクトと事業の施策をもとに各館が事業計画をたてて活動している。各博物館地域振興については平成19年度の答申を受けて平成20年度から

平成22年度までの3年間行ってきた。今年度からは各博物館の研究活動と成果還元について行う。研究費の県予算、学芸員数、研究機関としての位置づけがある館など各博物館のおかれている立場がそれぞれ大きく異なるが、各職員は研究活動とその成果還元について一生懸命努力している。学芸分野と事務分野との連携も研究活動を行うには非常に大切であり、また、博物館の経営、運営が大きく左右してくると考えている。

<文化財課長あいさつ> (永沼学芸振興室長より状況報告を含め説明。)

東日本大震災において各県立博物館の来館者及び職員等博物館関係者に被害はなかった。建物はかなりの被害を受け、各館が平常の状態で開館できたのは4月頃である。建物の主な被害としては房総のむらにおいて伝統的な工法の木造、土壁、瓦屋根の建築物に大きな被害があった。また大利根分館において液状化による被害もあった。他の館でも被害はあったが、建物の損傷等大きな被害はなかった。県では5月の臨時県議会で予算化し復旧に努めている。また中央博物館では陸前高田市の博物館の植物や昆虫の標本の修復作業を行っている。美術館、現代産業科学館は被災地を訪れ、避難場所で体験活動、映画会の事業を行ってきた。各館の節電対策としては、事務室等管理関係室消灯、冷房温度設定の調整等により、昨年度の最大電気使用量の15%削減に努めている。

今年度の博物館の当初予算については昨年度比2.35%の増額となっている。また収蔵資料のデータベース、県民への情報提供を目的に運用開始した博物館情報システムの新たなシステムの導入を検討している。また、千葉の文化を県民に知ってもらう「ちば文化発信プロジェクト」を今年度から始めた。親子で来館してもらう趣旨で、今年の小中学校新入生すべてに入館チケットを配り、5月の連休と夏休みにチケットの利用者が増えた。博物館、美術館を使った展覧会では、美術館の「山下清展」は好評で、現代産業科学館は「帰ってきた探査機 はやぶさ展」を開催する予定である。「授業に役立つ県立博物館プロジェクト」については学習キットの数も増え、昨年度は147回の出前授業を行った。厳しい予算の状況であるが、各館で創意工夫をして県民の皆様に興味をもっていただける、役立つ展示、体験、イベントを行っている。県民に愛される博物館となるようなお一層努力をする。

<議 事>

平成22年度各博物館の地域振興について(学芸・普及部会座長から全体説明。)

[質疑・意見]

委員：以前からの課題として3つほどある。まず、地域や県民のニーズに込えているか。次に、博物館の活動をもっと知らしめることが必要である。一般県民にはまだ見えていないのではないかと。ホームページは充実しているが見ている人がどのくらいいるのか考えると、他に、例えば企画展等の期間に館長をはじめ職員全員が名刺の裏面に企画展の内容を書き込み、情報を提供してゆくようなことをやっていかないとなかなか周知されないのではないかと。さらに、わかりやすい社会貢献が必要ではないかと。教育委員会のネットワークの中では実施しているが、一般の県民にわかりやすい方法をと

っているか。例えば千葉県の房総半島の海は福島の放射能の影響はあるのか、ということ地域住民と連携しモニタリングを行えば、それは博物館の幅広い社会貢献と評価される。3年間の成果を以上3つの視点からまとめると、その辺はまだクリアされていない。

委員：地域振興のパートを評価のポイントとして3つの視点で、もう一度洗い直してやる必要があるのではないか、との意見である。例えば具体的に県民ニーズについて言えば、入館者数の1年間の結果ではなく、3年間の動向をまとめることによってよりわかりやすくなるのではないかと。

委員：県民のニーズがどの辺にあるかをつかめれば来館者は増える。県民のニーズは様々ではない。どのようにリサーチしたら県民のニーズが見えてくるだろうか。

委員：まず、内部で話し合いをし、博物館ができることと、できないことを明確にしたうえで、社会貢献は多様であるがゆえ今の時代に緊急な問題としてどのようなことが必要なのか、また長期的に考えなければならないことなど、いろいろなことを整理する必要がある。

委員：博物館の復旧問題だけでなくすべての事業において、県民のニーズについて十分に内部では検討していると思う。

委員：博物館は、今できることとして、社会貢献を行っていることがあるが、例えば博物館の中だけではなく、他機関とネットワークを組むことによって、できることが広がってゆくことなど、もう少し検討するとよい。中央博物館で行っている標本修復についても博物館ならではできることであり、博物館が主になって進め、機会を提供すれば、県民が参加し、県民も一緒に社会貢献できる。

博物館が地域の観光資源、地域との連携、分りやすい良い企画をしてもメディアがなかなか取り上げてくれない。メディア戦略が必要である。何を行っている博物館かわかっている地域の理解者が増えることにより入館者が増えていく。

委員：大根分館で開催された昆虫の展示会は小学生の夏休みの自由研究としてとてもタイムリーな企画であり入館者が増えた。

委員：名刺の裏などにわかりやすく「自由研究に役立つ」と載せ情報提供するなど草の根的にやっつけていかないと広がらない。

委員：以前、三重県の知事が名刺に県内の地図、物産を記載し、県の職員が機会あるごとに、名刺を渡し広報した。

委員：名刺による広報は費用をかけずに効果的である。

委員：東日本大震災後、中央博物館が標本のレスキューに協力しているが、博物館が震災により塩を被ってしまった標本を復元している努力をきちんと皆さんに分かるように特別に展示したらよい。具体的な復元作業内容、また標本を残すことの重要性を合わせて知らせる。大災害にどう対処していくか、報道等に公開する良いチャンスであり、とても関心は高いと思う。標本の復元は自然誌の博物館として維持することがどう役立つかを示すのによい機会である。博物館がもっているこれまでの蓄積、知見をもとにしてきちっと伝えていくことが非常に重要である。マスメディアの報道があつて初

めて大事な問題であるということではなく、博物館、特に自然科学系の博物館が自分たちの生きている地球の状況をきちっとその時々に応じて発信してゆくべきことが大切である。

中央博物館：中央博物館では大震災以降、大きく3つの展示を行ってきた。地震津波の直接のメカニズム、震源地の問題の展示、被災地から送られてきた標本のレスキューの修復作業内容とその状況を説明し実物を展示している。地殻変動がおこるところでしかない千葉石について千葉県の特徴を表している鉱物として常設展示に組み入れた。9月1日には関係者向けに震災博物館の状況報告を行う。震災によって学んだこと、課題としてわかったこと、博物館が今後、震災に対して備えておく必要なこと、これらを次に伝えていかなければならないことが共通認識になっており、そして伝えてゆくにはどうするかが大きな課題となっている。

委員：ニーズは顕在化していない。隠されているものを博物館が掘り起こさなければならぬ。交流やアンケートなどの中から見つけていくことが必要である。

委員：博物館は頑張っており良くなってきていると感じている。山下清展は県民のニーズも多かったと思うし、非常に良かった。広報では、朝日新聞にシリーズもので連載され、その効果は大きかったのではないか。検証してみたいか。恐竜展も1回限りではなく、何回か載せることで効果が上がるのではないか。ぜひ続けてほしい。

中央博物館：朝日新聞の連載については1年間、中央博物館と国立歴史民俗博物館で交互に連載しているところである。

委員：現代産業科学館で、新規事業として市川市役所記者クラブを中心とした速報広報に努めたとあるが、どうして始めたのか。

現代産業科学館：県立の博物館ではあるが地域密着型ということで、市川市役所内の報道機関のボックスを利用し、近いところから情報を発信しようという発想から始めた。地域のミニコミ誌にも多く載せてもらったり、相互に情報をいただいたりして、地域との連携を深めている。

委員：地域情報誌は、取材して情報を得たいことでかなり積極的なので、活用されてよいと思う。

現代産業科学館：「3. 11」に関わる事業として、現代産業科学博物館は科学系、工業系の部分でエネルギー問題についてやらなければならない。ヨードについて以前は千葉県が世界的にも多く生産していた。ヨードを採るときに天然ガスが一緒に出てくるというエネルギー問題がある。天然ガスはこれから益々脚光を浴びる。「千葉県の産業遺産を巡る」計5回シリーズの企画を立て、10月から始める。利根川、大多喜地方など現地にもいって勉強してくる。「3. 11」にかかわってエネルギー、ヨードについて県民の皆さんに知っていただきたい企画した。

(2) 各博物館の研究活動と成果還元について

(学芸・普及部会座長より全体説明の後、各館から説明。)

委員：少ない研究費のもと、頑張っていることはわかった。

委員：研究費予算について、22年度予算額は示されているが、各博物館の23年度予算額はいくらか。

各博物館：前年度と同じ金額である。

委員：入館料は博物館に入るのか、県に入るのか。

文化財課：県に入るが、博物館各館に還元される。

博物館：当該年度の予算は、その年度の入館料を見込んでたてている。

文化財課：博物館予算は昨年度比で2.35%の増である。県全体でも非常に厳しい予算の中でわずかでも増えている。美術館で開催した「山下清展」は当初予定されてなかった特別事業で、予算の確保等に努めた。

委員：海の博物館において、今後の課題として研究を行うことができる専門分野の職員が不足していることについて、これは全ての館でも同じことだと思う。職員が継続して研究できるように採用できる環境をつくっていかないと致命的なことになる。

中央博物館：博物館はノウハウを蓄積し継承していくことが大切であると考えており、40歳前後の学芸員職員が抜けてしまっている現在の状況にたいへん危惧している。

委員：良い会社は必ず各世代がいないと続けていけない。通常の業務でも多忙なところに特に今年は標本復旧のボランティアなど専門的なところでも頑張っていて博物館の努力を感じる。協議会委員としても博物館が現在、必要としていることについて何か協力できないか。

委員：協議会として要望を申し入れできないか。一つは人員の問題がある。中央博物館でも辞めていく人がいて、その分野の専門が抜けることになる。そのあと補充をしていないのは博物館のその分野の機能が果たされていない状況であり、見逃すことはできない。それぞれの分野に必要で採用しているのに欠けた後に補充しないのは、ある分野では使命を果たしていないことになる。博物館が事業、研究をしてゆくには、予算の検討が必要であり、協議会として要望できないか。

委員：地域振興について3年間、地道に検討し成果がでてきた。博物館は、研究、社会貢献について今まで行ってきたが人と予算についての問題がある。どこかへ要望として提案することはできないか。

博物館：協議会委員の先生方のご意見、お気持ちは十分いただいた。今後、博物館がいろいろな要求をする中で実現を目指す努力をしてゆきたい。

委員：専門職員の不足については、当初の配置計画で職員を採用しているが、中途退職による職員について、またそれに見合った補充採用がなく専門職員が不足しているデータを出してほしい。中央博物館の自然誌系でいえば、今まで様々な専門職員がいて館の機能が維持されていた。しかし何人かの専門職員が辞めていったが補充がないということは、本来、館としての機能すべき分野が機能していないことである。不足の状況は館としての機能が果たせてなく、行政的にも問題である。次回にでもデータを出してほしい。

中央博物館：退職した専門職員の分野、専門職員数、その後の採用数と採用者の専門分野については調べて出せますが、専門職員が抜けたことによって、中央博物館の全体と

しての機能がどのくらい低下したかを示すことは難しい。

委員：それでは、常設展示の更新の頻度、企画展として行っている新しい分野、欠けた職員の分野については行っていない分野があるのかといったことがわかれば、職員が欠けたことによる専門分野の欠落部分を示すことができるのではないか。

委員：協議会の役割が諮問を受けて答申することであることはわかる。当協議会において博物館へのサポーター的な意見が多くだされていることを何らかの要求等の機会に示し、反映してもらえればと思う。

中央博物館：このことについては、委員の先生方がお話いただける機会に発信していただき、これからもサポートをお願いする。

委員：予算について、教育費予算が増えていなければ、その内の博物館予算が伸びていくことは難しいということか。

文化財課：当課も、予算増、人の配置増について絶えずお願いをしているが、県全体として採用がない、予算が厳しいため、博物館の要求どおり措置できない状況である。その中でも特別な事業の実施にともなう予算をもらっている。研究費予算については、企画展にかかる予算等も含まれてくる。文化財課は絶えず要求している状況である。

委員：研究費予算等について、分かりやすく示して欲しい。

委員：「3. 11」による放射能問題の影響で世間一般が不安な状況になっている。博物館の屋外のフィールドについて放射線量は測らないのか、害があるのかないのか、そういうことを含めて放射能の影響について文化財の視点から見て、博物館として研究をして、また後世のために、その時の記録を残してもらえるとよい。

文化財課：放射線量の測定については測定器が非常に少なく、現在、子どもたちの活動場所を優先的に測定している。測定器が入りしだい博物館の施設を測定する予定である。

委員：美術館の研究事業の構成について、「千葉関係の作家で、これまで発表されることが少なかった作家に焦点を当て、その業績や作品について取りまとめる。」とあるが、どの程度の範囲の方を考えているのか。県内の作家で無名の方はたくさんいると思うが、ギャラリーのようなブースを設けることはできないか。作家は県民から作品を見てもらい、また作家自身の存在を知ってもらうことにより意欲的になる。さらに作家の作品を目的に来館する人が増え、入場者数も増えるといったプラス思考で考えたらいかかがか。

美術館：現在、ひとつの部屋が大きいので、一人の作家の作品展示ということが難しい。今度の改修工事において、若手の育成といった観点からも、小スペースの部屋を確保できるよう検討してゆきたい。

委員：ブースが広いのであれば、部門別に何名かで構成して参加することも可能ではないか。参加できるやり方を考えてほしい。

現代産業科学館は、展示・運営協力会と連携した展示会・実験工作教室・サイエンスショーを実施している。最近、テレビなどで、でんじろう先生が話題となっているが、大人でも楽しい実験をやっている。今後の課題として「一般成人向けのプログラムの開発」とある。予算的な問題もあるが、「あの先生の実験なら見に行きたい」と

か関心をひく講師を招いて、スポット的なものを年に何回かやってみたらいかがか。それによって、他の実験教室、イベント等へも興味をもってもらい、参加者が増えると思う。初めは集まらないかもしれないが、前段として、話題の講師によるサイエンスショーなどを行ってはいかがか。それによって見て楽しい、体験して実感できる博物館ができればよいと思う。

(3) その他
(なし)

<その他>

(文化財課より中央博物館大多喜城分館の改修について委員から意見を伺う。)

文化財課：中央博物館大多喜城分館の改修を考えており、委員の先生方からご意見をいただきたい。昭和50年に開館し36年目になる。4階建てだがエレベーターが設置されていないので車いすで上の階まで行けない状況である。アンケート調査から、歴史博物館の魅力ある展示、観光客の集客、エレベーターの設置など要望が上がっている。どのような視点で改修したらよいか、ご意見をいただきたい。

委員：大多喜の町はたいへん素晴らしい江戸の文化、いわば江戸の美術館のような機能をもっている町である。大きな目標をたてて、いすみの美しい山寺の行元寺などいすみ地区における江戸の文化財へ視野を広げるなど地域の文化財と連携できるようなセンター的な機能をもってほしい。展示内容についても文化的な、技術的な工芸を含めた展示とし文化の拠点としてほしい。それには建物だけでなく、周囲に庭園など市民も憩える場所があるとよいと思う。全体のフィールドミュージアムであってほしい。

委員：人物がみえる、歴史がみえる博物館、セールスポイントをもつことが大切である。

委員：地域連携、地元を拠点とした広がりをもったフィールドにして、人が集まるようなことを検討してゆく。センター的な、案内ができる中核的な役割を果たしてほしい。

委員：時代のブームでニーズがある撮影会などにも対応できるとよいのではないか。

委員：現在の大多喜城分館は入口、駐車場などわかりにくい。格子状の窓は開放的にした方がよい。トータルで大多喜城とわかるつくりにしてほしい。展示については地元の歴史がわかる資料、歴史上の人物など現在あるすばらしい資料を展示してほしい。

委員：城の建物の中での展示には限界がある。現在の状況でエレベーターの設置には費用がかかる。建て直した方が安いのではないか。費用対効果があまり見込めないと思う。

委員：地域振興、地域連携といっても、たいへんなことである。この計画全体をどこが中心になってやるのか、少ない予算でやっていくには、他の機関と話し合っていないとよいものできないと思う。

委員：地域の生態系、文化を大事にしながら、誰が地域振興を担うのかを含めて、何かコンセプトが必要である。以上のことを踏まえてもう一度検討していただきたいと思う。

<閉会>